

教育だより

特別号 (2025 年度教育協カウィーク)

9月8日～12日にかけて教育協カウィーク 2025 を行いましたので、そのダイジェストをお届けします。

目次

(全体) 教育協カウィーク・オープニングセッション：教育協力、その歩みの先へ — キーワードから語る、共創の未来 —	2
「障害児・者を取り巻く教育現場における排除と包摂について考える～途上国の障害 当事者を招いて～」	3
企業と JICA との共創セッション (基礎教育、技術教育、職業訓練分野)	3
「いただきます」を世界へ：日本の食育を国際協力の視点で学びなおす	4
紛争影響下の中で、人はなぜ学び続けるのか — 高等教育×平和構築 —	5
「学校保護宣言」策定から 10 年、日本政府による賛同に向けて — 教育を攻撃から守る世界のグッドプラクティスから考える —	5
「気候変動 + 防災」に対して教育協力で何が出来るか？ What Can Educational Cooperation Do for “Climate Change + Disaster Risk Reduction”	6
進め！算数アプリ！！～パプアニューギニア・ネパール・ザンビアでの事例と今後の展望～	7
「教育×無償資金協力×技術協力」～未来に繋ぐ教育協力の在り方について～	8
先生の“学び方”が授業を変える：ICT 時代の研修デザイン	9
文部科学省「日本型教育の海外展開 (EDU-Port ニッポン 2.0)」	9
～日本型教育の海外展開 (EDU-Port ニッポン)×アフリカの教育課題の今とこれから～	
どうして総括やってるの？ — 教育開発プロジェクトマネジメントの極意に迫る	10
～海外から学ぶこれからの教育～ 2025 年度 JICA 教師海外研修 (教育行政コース) 報告会	11
バングラデシュ初等教育協力の 20 年を振り返り、次の未来を描く	12
学生・若手社会人のためのキャリアセミナー - 国際教育協力への携わり方 -	13
高専 × KOSEN 高専教育の海外展開	14
次世代と考える「自分ごと」としての平和	14
20 年の歩み、そして未来へ：PNG 教育協力の軌跡と共創の未来図	15
理科教育における動画教材の効果とは？ 途上国での活用のヒントを探る	16
クロージングセッション	17



「教育協カの未来が描く、理想の「学び」とは？」

「理想の「学び」を生み出すために、どんな共創ができそうか？」

オープニングセッションでは、開発コンサルタント会社や民間企業など教育協カの実務者から中学校の副校長、アカデミア、ガーナからの日本への研修員など多様なアクターの方々と一緒に、教育協カのあるべき未来について語り合いました。また、テキストマイニングを使用し参加者の皆様にも意見を出していただくことで、全員で「学び」について深く考える時間となりました。

私は一大学生として参加させていただいたのですが、お話をする中で多くの学びがありました。「学び方を学ぶのが大切」、「学びを提供する私たち自身も学び手である」、「学ぶ中では、自分の専門性を突き詰めつつ相手とも繋がるのりしろが重要」など、それぞれの経験と本セッションの対話の中で生まれた言葉がたくさんありました。貴重な機会をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

<登壇者（順不同）>

- 伊藤 汐里（株式会社 コーエイリサーチ&コンサルティング）
- 荻巣 崇世（東京大学教育学研究科 准教授）
- 笠井 淳子（稲城市立 稲城第五中学校）
- 杉戸 卓磨（公益財団法人 シャンティ国際ボランティア会）
- 中谷 のの子（関西学院大学 JICA 人間開発部インターン）
- 藤平 朋子（株式会社 すららネット）



登壇者の皆様（上段左より時計回りに、中谷さん、藤平さん、荻巣さん、伊藤さん、笠井さん、杉戸さん）

理想の「学び」について話して下さった、ガーナから留学中のブライトさん

教育協カの未来が描く、理想の「学び」とは？

The word cloud contains the following terms and phrases:

- Digital & Innovative Learning
- Intercultural Learner-Centered 共創
- 公平なアクセスと高い質の教育
- 能動的学習
- 広義のインクルーシブな教育
- 自己実現=社会実現
- 学びたいことが制限なく学ぶことができる
- 多様性
- 自分の興味と基礎学力の獲得のバランスの取れたカリキュラム
- 全人的成長がある みんなのもの
- 学校だけではなく
- いろいろな物事を考えるようになる教育
- 生きる力
- 教師のバイアスをなくす
- 広い
- 生涯学習
- 学び合い
- 子供たちが、わくわくしながら取り組むことができる環境や機会
- 自由な発想を抑制するのではなく許容するもの
- 深い
- 理想が共有される
- DX
- 夢を持つ
- Inclusive
- 創造力
- インクルーシブ包摂
- 話し合い
- 個性
- 楽しい
- 自己実現
- 世界を広げる
- 可能性を広げる
- 夢を叶える
- 創造力
- Inclusive education
- 主体性
- 自律
- 常に人間を成長させる教育
- 将来につながる
- のりしろ
- 協働
- 課題解決型
- 自由
- Inclusive education
- 多様
- 学ぶ自由
- 学ばない自由
- 循環
- 持続的な教育システム
- 違いを受け入れる力をつける
- 多様
- 学ばない自由
- 学際的
- 自分らしさ
- 選択
- いつでも、どこでも、だれでも、必要な知識・技術を習得できる
- 横断的で持続可能な学び
- 人生そのもの
- 笑顔
- 自分で考える力
- 新潟国際ボランティアセンターです。冒頭変換ミスがありました。
- 多様な場所で得られるもの
- 心地よいもの
- 将来の可能性が広がる
- おもしろいな〜と感じること
- 周りとの協力が、国際協カへと広がって行く
- 最低限の
- 障害インクルーシブな教育
- 包摂性
- 隣人と共に
- いつでも、だれでも学べる
- Multilingual
- 隣人と共に学び合う
- Learning
- 生きがいが見つかる
- 問いを立てる力
- 多文化・多言語的視点
- 自発的な学び
- Inclusive Learning

参加者の皆様からのアイデア①

理想の「学び」を生み出すために、どのような共創ができそうか？

一人一人が繋がりが広がって行くことで世界が一体となって共創する
子ども主導の取り組み 正解はひとつじゃない
情報アクセシビリティ こうでなければならない、地域のネットワーク、デジタルネットワーク、
一歩でしてみる 組織が違うと違う言語を話している前提で話す こうでなければならない、を
新しい仲間を増やす こうでなければならない、を一旦疑ってみる こうでなければならない、を一旦
E-learning 教えない 日本の経験・過去の経験に縛られない パイを増やす 垣根を超えて 聴く
弱者から学ぶ 理想を押し付けない オンラインEdTech 有権者を味方に付ける 地域社会
若者のアクション 同じことの繰り返しに見えても深めることを軽視しない 相互理解 ICT つなが
対話 学校×地域社会 学校×地域住民 学校×地域住民 まずは飲み会で仲良くなってから テクノロジー つながる
参画者を格段に広げる 思いを効果的に実現するためのシステム作りを国境を越えて youthvoices
ローカルビジネス×学校 甲乙を超えてほんとうに教育を良くする方法を考える とにかく巻き込む
企業利益を超えた、共創への「価値」が認められなければならない

参加者の皆様からのアイデア②

関西学院大学 JICA 人間開発部インターン 中谷 のの子

教育協カウィーク

「障害児・者を取り巻く教育現場における排除と包摂について考える～途上国の害 当事者を招いて～」

本セッションでは、スーダンと日本で教育を受けた経験を持つ視覚障害当事者のアブディン・モハメド氏を招き、幼少期からの教育環境や障害との向き合い方、そしてスーダンでの障害児教育支援の取り組みについてお話を伺いました。特に、障害の有無だけでなく、民族・宗教・言語など複層的な要因による排除と包摂の構造や、教材・試験制度の課題など、途上国の教育現場の実情が語られました。

続くパネルディスカッションでは、聴覚障害当事者の廣瀬芽里氏、開発コンサルタントの堀場浩平氏を迎え、DPI 日本会議の崔榮繁氏の進行のもと、障害児・者の教育における排除と包摂について議論しました。通常学級の在り方を根本から見直すことがインクルーシブ教育の鍵であるとされ、制度面だけでなく、現場の熱意や日々の実践の積み重ねの重要性が共有されました。

<登壇者>

アブディン モハメド（東洋大学国際共生社会研究センター）

崔 榮繁（特定非営利活動法人 DPI 日本会議）

廣瀬 芽里（一般社団法人撫子寄合／特定非営利活動法人 Yes,Deaf Can!）

堀場 浩平（株式会社国際開発センター）

人間開発部 基礎教育第一チーム 川崎 友美

教育協カウィーク

企業と JICA との共創セッション (基礎教育、技術教育、職業訓練分野)

JICA は開発途上国の基礎教育・職業訓練分野の課題解決に向け、日本の教育関連企業の事業参画を促すこと、開発コンサルタント等のアクターとのネットワーキングを目的として企業との共創活動を検討・推進しています。本セッションでは、企業共創の概要

や具体的な事例解説、「インクルーシブ教育（障害児教育）」「アフリカ×技術教育・職業訓練」「デジタル×基礎教育」の3テーマについて概要の説明が行われた後、企業の途上国進出における課題感の共有やそれに対する意見交換が各グループで行われました。企業だけでなく、各テーマに知見をお持ちの開発コンサルタントの他、NGO、大学関係者など多様な方々に集まって頂きました。「インクルーシブ教育（障害児教育）」については後日フォローアップセッションも実施されました。今回つながった皆様とのご縁を大事にして情報発信・意見交換を継続し、今後も同様のセッションを継続してまいります。

<登壇者>

松山剛士（JICA 人間開発部基礎教育グループ）

山口友理子（株式会社ドリームインキュベータ）

村田敏雄（JICA 人間開発部基礎教育グループ）

杉山竜一（株式会社パデコ）

人間開発部 基礎教育第一チーム 橋本裕保

教育協力ウィーク

「いただきます」を世界へ： 日本の食育を国際協力の視点で学びなおす

本セッションは日本の食育の特徴を振り返り、その上で国際協力の可能性を探ることを目的に開催し、70名を超える方々に参加いただきました。

第一部では、日本の食育の政策や、自治体の役割や取組の他、学校給食を「生きた教材」とする食育が、栄養教育とは異なり、食を通じて他者への配慮など視野を広げていく学び（非認知能力の育成）であることを理解する機会となりました。また、食育の実践にはセクターを超えた協働と、異なる視点の理解が重要であることも共有されました。

第二部では、食育そのものを目的とするのではなく、食育を通じてどのような子どもに育ててほしいかを考え、課題解決を目指すことが重要と議論されました。さらに、多部門での連携の大切さが指摘され、関係者を巻き込んだ計画策定の必要性が示されました。

日本の食育の価値とその国際協力の可能性を再認識し、多様な連携によって、より良い未来と健康的な食生活を築くための一歩となりました。

<登壇者>

齊藤 るみ（文部科学省 初等中等教育局 健康教育・食育課 学校給食調査官）

石塚 浩司（静岡県袋井市総合健康センター 健康未来課 健康企画長）

重田 玲子（愛知県豊田市立豊田特別支援学校 栄養教諭）



第二部のパネルディスカッションの様子

人間開発部 保健第二グループ 保健第三チーム 鎮目 琢也



紛争影響下の中で、人はなぜ学び続けるのか — 高等教育×平和構築 —

近年、世界の紛争や武力衝突の数は年々増加・長期化しており、気候変動や貧困の影響から、課題は複合化しています。本セッションでは、これまであまり着目されてこなかった紛争影響下における高等教育に焦点を当て、高等教育の継続やその意義、それに対して日本が果たし得る役割等にかかる議論を深めました。

パネルディスカッションでは、「苦しい状況下でも学ぶことで未来を信じていることができる」というウクライナ人学生の思いに応えるように、群馬大学の飯島副学長からは「教育は国を創る根幹という強い意志の下で学ぶことを諦めないでほしい」と力強い言葉が語られました。また、ウクライナ人学生との交流を通じて、日本の生徒・学生が紛争や紛争影響国の「いま」を知ることに繋がり、日本が受け入れることの意義を確認しました。出張で複数回ウクライナを訪れている日比野副室長からも、現場で見たものをしっかり伝えていくことの重要性が強調されました。

<登壇者>

小松 太郎（上智大学総合人間科学部教育学科教授）

飯島 睦美（国立大学法人群馬大学理事（教育・評価担当）・副学長）

マリア（国立大学法人群馬大学）

日比野 崇（JICA 中東・欧州部ウクライナ支援室副室長）

笹川 千晶（JICA 人間開発部高等教育・社会保障グループ）



パネルディスカッションの様子。

左上から時計回りに、モデレーターを務めていただいた小松教授（上智大学）、パネリストとしてご登壇いただいた日比野副室長（ウクライナ支援室）、飯島副学長（群馬大学）、マリア氏（群馬大学）。

人間開発部 高等教育・社会保障グループ 笹川 千晶・飯島 美穂子



「学校保護宣言」策定から 10 年、日本政府による賛同に向けて— 教育を攻撃から守る世界のグッドプラクティスから考える—

世界では子どもの 5 人に 1 人、数字にして約 4 億 7,300 万人の子どもたちが紛争地で暮らしています。子どもたちが通う学校はひとたび軍事利用されてしまうと、学校自体が「軍事標的」としてみなされ、さらに攻撃にさらされやすくなってしまいます。本セッションでは、学校を軍事利用と攻撃から守るための国際的な指針である「学校保護宣言」に賛同した国々のグッドプラクティス（好事例）について、ルウェーとケニアより国内の政策の変化や子どもたちを守るための具体的な取り組みの紹介がありました。また、「学校保護宣言」と国際人道法に関する法的な見地からの解説、「学校保護宣言」および紛争下の教育について学んだ日本の中学生の声、そして日本は同宣言に賛同するべきかについて議論を深めました。さまざまな立場で活動されているゲストの話は、紛争下の子どもたちの教育を守ることの重要性・緊急性を再認識させる内容となりました。

<登壇者>

Signe Astrid Engli（ノルウェー大使館（参事官））

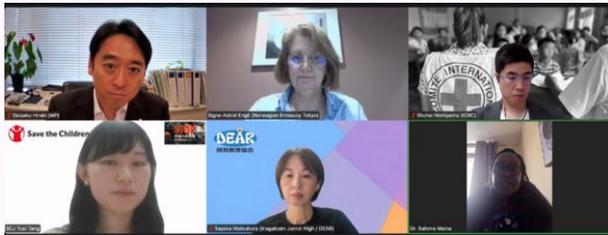
Salome Maina（ケニア教育省（教育担当部長））

西山 秀平（赤十字国際委員会駐日代表部（法律顧問））

松倉 紗野香（埼玉県伊奈学園中学校（英語教諭））

平木 大作（参議院議員）

唐 語思（公益社団法人セーブ・ザ・CHILDREN・ジャパン（社会啓発オフィサー））



パネルディスカッションの様子
（モデレーター：セーブ・ザ・CHILDREN）



「学校保護宣言」ガイドライン2にかかる法的解釈の解説

公益社団法人セーブ・ザ・CHILDREN・ジャパン アドボカシー部社会啓発チーム 唐 語思

教育協カウィーク

「気候変動＋防災」に対して教育協カで何が出来るか？
What Can Educational Cooperation Do for “Climate Change
+Disaster Risk Reduction”

本セッションでは、気候変動・防災における教育の役割に焦点を当て、研究者・実務者など立場の異なる専門家が、包摂的な教育協カの可能性について議論を行いました。

冒頭では、登壇者が最新データを基に、世界で起きている自然災害や気候変動の発生頻度、その影響を概観しました。続いて、防災・減災に係る教育の役割について、理論的な枠組みが示され、日本、トルコ、ネパールといった災害を経験してきた国の事例から家庭・学校・コミュニティ・メディアが担う役割や実践の工夫が紹介されました。後半では、持続可能な社会に向けて、途上国での国際協カを通じた防災教育の展開について議論が行われました。人材育成や資源確保の重要性に加え、地域との協働や ICT 活用など具体的な取り組み方法が話し合われました。

<登壇者>

ショウ ラジブ（慶応義塾大学 SFC 総合政策学部 教授／政策・メディア研究科 教授）

スベンドリニ カクチ（認定 NPO 法人 SEEDS Asia 理事）

桜井 愛子（神戸大学大学院国際協カ研究科 教授 兼 東北大学災害科学国際研究所 教授（クロスアポイント））

Ayşe Yildiz（英国レスター大学リスク・危機・災害マネジメント学科 助教授）

相馬 敬（株式会社パデコ 取締役/常務執行役員）



2名の登壇者（上：桜井氏、下：Yildiz氏）



3名の登壇者（左：相馬氏、右奥：カクチ氏、右前：ラジブ氏）

株式会社パデコ 服部 真侑

教育協カウィーク

進め！算数アプリ！！

～パプアニューギニア・ネパール・ザンビアでの事例と今後の展望～

JICA 算数タスクチームでは、紙媒体の算数教材をベースにした算数アプリ「JICAL」を開発しました。JICAL はオフラインでも利用可能で、現在はパプアニューギニア・ネパール・ザンビアで実践しています。本セッションでは各国での活用状況や成果、課題について JICA 内外の関係者が事例を報告しました。はじめに JICAL 開発や導入時の課題が報告され、パプアニューギニアの STEP MAS プロジェクトにおける効果、大洋州への展開可能性、ネパールでの活用事例と成果、ザンビアでの取り組みと課題についてお話いただき、最後に世界の ICT 教育の現状と今後の課題について提起がありました。これまでの実践から、指計算を卒業する子どもが増える等の成果が見られています。今後も JICAL の各国での更なる活用と、子どもの学びの改善を目指し取り組んでまいります。

<登壇者>

- 大野 岳夫（ヘルスアンドテック合同株式会社 CEO）
- 伊藤 明德（パプアニューギニア「初等理数科教員養成校強化プロジェクト」(STEP MAS プロジェクト)）
- 安川 奈々恵（パプアニューギニア「初等理数科教員養成校強化プロジェクト」(STEP MAS プロジェクト)）
- 木田 光二（パプアニューギニア教育政策アドバイザー）
- 清水 一平（ネパール教育アドバイザー）
- 古田 優太郎（UNICEF UNV）
- 田口 晋平（拓殖大学政経学部 准教授）



上段より時計回りに清水氏、古田氏、田口氏



左上段より大野氏、伊藤氏、木田氏、安川氏

人間開発部 基礎教育グループ 基礎教育第一チーム インターン 森川有砂



本セッションでは、JICA 資金協力業務部とインテムコンサルティング（株）との共催により、「教育×無償資金協力×技術協力」をテーマにウェビナーを開催。教育案件に携わる専門家・リソースパーソンをお招きし、無償資金協力と技術協力による相乗効果について、好事例とともにご紹介しました。

登壇者の皆様からは、主に以下のような貴重な知見・経験が共有されました：

- ◇ 無償資金協力と技術協力が緻密に連携することにより、効果的な施設の仕様・機材選定等に繋がり、相乗効果が発揮された。
- ◇ 無償資金協力による施設・機材の効果的な活用を通じて、相手国教員・学生の教育活動・行動において具体的な変容が見られた。事業を通じて一緒に変化を生み出していくことができる。

また、国際協力を志す若い世代に対して、国際協力に従事する魅力・醍醐味や、多様なアクターが連携し合いながら事業が実施されていることについても、前向きな発信ができたと考えています。

<登壇者>

- 中和 渚（関東学院大学建築・環境学部）
- 杉浦 晃（株式会社毛利建築設計事務所）
- 藤川 朋子（株式会社毛利建築設計事務所）
- 塩田 恵（株式会社パデコ）
- 岡本 明広（インテムコンサルティング株式会社）
- 高橋 敦（国立大学工学部能力向上プロジェクト）



登壇者の皆さんとの集合写真！

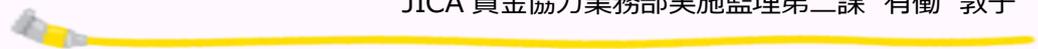


セッションの様子①



セッションの様子②

JICA 資金協力業務部実施監理第二課 有働 敦子



本セッションは、ICT 時代の教員研修をテーマに、ICT が教師を「教える人」から学びを支えるファシリテーターへ導き、授業改善を加速する条件を検討しました。

前半では、通信環境・リテラシー・制度支援など途上国の課題と、ラオスの算数指導力強化プロジェクトの事例、そして「大人の学び」の理論を踏まえた、ラオス事例における教師研修の課題について紹介しました。

後半では、①教師が課題認識を深めるプロセスとは、授業についての知識や技術を学び、それを授業で実践する単線形ではなく、実際の授業をとおし反省を繰り返すこと（相互関連モデル）、②オンライン双方向学習を支えるルール設計・状況的学習、③教員の学び合いコミュニティ継続・活性化の鍵（中心にいる人からの声かけ、管理職からの後押し、外部刺激の意図的な導入）について討議しました。ICT は学びの触媒として、教師が学び続け授業をアップデートする循環を支えることが強調されました。

<登壇者>

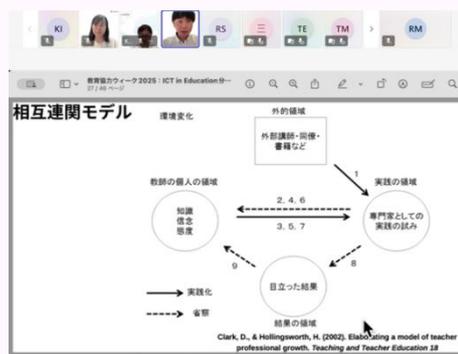
朝守 啓太（株式会社パデコ 教育開発部 プロジェクトコンサルタント）

今野 貴之（明星大学 教育学部教育学科 教授）

松月 さやか（パシフィックコンサルタンツ株式会社 国際スマートプランニング部主任コンサルタント）



壇者（左から今野教授、朝守氏、松月氏）



相互関連モデルの説明

(株) コーエイリサーチ&コンサルティング 水野玲奈

文部科学省「日本型教育の海外展開（EDU-Port ニッポン 2.0）」
～日本型教育の海外展開（EDU-Port ニッポン）×アフリカの教育課題の
今とこれから～

EDU-Port ニッポンは、「日本型教育の海外展開×アフリカの教育課題の今とこれから」をテーマにセッションを開催しました。JICA 樋口氏は、サブ・サハラアフリカで約 9 割の子どもが直面する「学習貧困」の状況とその解決を目指す「みんなの学校アプローチ」や、企業連携の取組を紹介しました。ライフズテック石川氏は、ガーナで 2,000 名以上に無償プログラミング教育を提供した経験に基づき教育省と MoU を締結して有料展開に踏み出したこと、With The World 五十嵐氏は 67 カ国・546 校をつなぐ国際交流プログラムを通じ、子どもたちが社会課題を学び支援活動に参加する取組を報告しました。Colorbath 吉川氏は、教材やタブレット購入に関するマーケット調査等を通じ、日本企業の現地展開を支援している事例を共有しました。ディスカッションでは、事業の持続性

や協働の形、教師の意欲や価値観の違いについて議論が行われ、日本型教育のアフリカでの展開可能性と共創の重要性が改めて確認されました。

<登壇者>

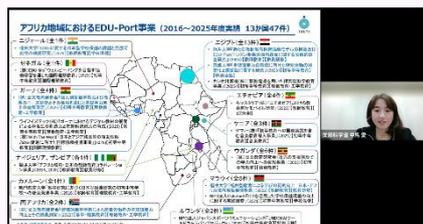
中馬 愛 (文部科学省 大臣官房国際課 海外協力官)

樋口 創 (国際協力機構 (JICA) 人間開発部 基礎教育グループ 基礎教育第2チーム 課長)

石川 孔明 (ライフズテック株式会社 取締役 CFO / Impact Officer)

五十嵐 駿太 (株式会社 With The World 代表取締役)

吉川 雄介 (NPO 法人 Colorbath 代表理事 / CEO)



開会挨拶 (文部科学省中馬氏)



ディスカッションの様子

(左上: 吉川氏、右上: 五十嵐氏、
左下: 樋口氏、右下: 石川氏)



EDU-Port ニッポンからのご案内

EDU-Port ニッポン事務局 / 株式会社コーエイサーチ&コンサルティング 石川健太

教育協カウィーク

どうして総括やってるの？

—教育開発プロジェクトマネジメントの極意に迫る

本セッションでは「どうして総括やってるの？教育開発プロジェクトマネジメントの極意に迫る」をテーマに、ベテラン総括が参加者に「総括を目指して欲しい」という心意気を伝える座談会を行いました。若手コンサルタントがモデレーターを務め、総括陣に「総括の仕事を一言で言うと？」「楽しい瞬間は？」「大変なことは？」と率直に質問。登壇者のユニークな回答をきっかけに、活発な対話が繰り広げられました。「伴走者」「交渉人」「同じ成功を繰り返さない」といった言葉からは、プロジェクト運営や現地のカウターパートとの関わり方に込められた知恵や工夫が伝わり、若手世代にとって貴重な学びの場となりました。参加者からのフィードバックでは、来年は「どうして副総括？業務調整？開発コンサルタント？」等、様々なアクターから話を聞きたいとの声が寄せられました。教育開発への関わり方に興味を持っていただけたと思います。ありがとうございました。

<登壇者>

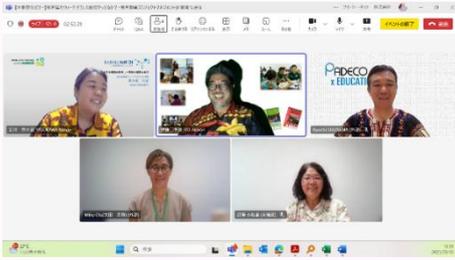
杉山 竜一 (株式会社パデコ)

伊藤 明德 (アイ・シー・ネット株式会社)

太田 美穂 (株式会社コーエイサーチ&コンサルティング)

武藤 小枝里 (インテムコンサルティング株式会社)

安川 奈々恵 (アイ・シー・ネット株式会社)



セッションの様子（左上から安川氏、伊藤氏、杉山氏。
左下から太田氏、武藤氏）

アイ・シー・ネット株式会社 安川 奈々恵

教育協カウィーク

～海外から学ぶこれからの教育～ 2025 年度 JICA 教師海外研修（教育行政コース） 報告会

● 教師海外研修とは？

日本の教員等が、7～10 日間程度、教育分野を含む途上国の国際協力の現場を訪問し、国際理解教育/開発教育の理解を深め、日本の教育現場で活かすことを目的としています。

2025 年度は、一般教員 11 コース、教育行政（学校管理職・指導主事等）1 コースを実施しました。

● 参加者のコメント

- ・日本では馴染みの少ないパプアニューギニアという開発途上国を訪問して、日本とは異なった発展状況や文化を実感するとともに、日本との関係、国際協力の意義などを理解した。今後の国際理解教育/多文化共生の推進に活かしていきたい。
- ・恵まれているとはいえ教育環境で目を輝かせて意欲的に学ぶ子どもたちを見て、「学ぶ喜び」を再認識した。「教育の可能性」を信じ、子供たちの「学ぶ意欲」を育てていきたい。
- ・学校管理職として、教育活動の意義や価値を捉え直すとともに、外国につながる子どもへの支援など、学校の文化や風土を創っていききたい。

<登壇者>

- 口岩 竜馬（北海道 江別市立中央小学校 主幹教諭）
- 菊地 桂子（岩手県 一関市立藤沢小学校 校長）
- 笠井 淳子（東京都 稲城市立稲城第五中学校 副校長）
- 稲田 恒久（愛知県 豊橋市立磯辺小学校 校長）
- 杉浦 繁（愛知県 西尾市立佐久島しおさい学校 教頭）
- 大西 敏之（奈良県 奈良市立大安寺西小学校校長）
- 北谷 晃久（大阪府 大阪市教育委員会事務局 指導部 指導主事）
- 平田 俊彦（広島県立芦品まなび学園高等学校教頭）
- 小川 隆弘（宮崎県 宮崎第一高等学校 主幹教諭（進学指導部長））
- 山崎 香織（宮崎県立日南くろしお支援学校 主幹教諭/高等部主事）



ソゲリ小学校（協力隊員活動現場）



Sacred Heart Teachers' College

JICA 広報部 地球ひろば推進課 安元 孝史

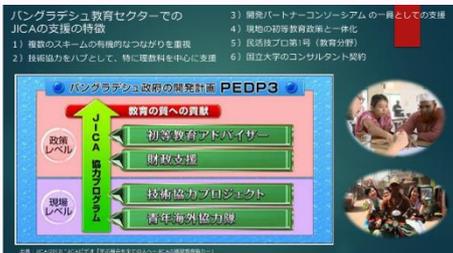
教育協カウィーク

Bangladesh 初等教育協力の 20 年を振り返り、
 次の未来を描く

本セッションでは、まず馬場教授より、開発学と教科教育学の視点から教育の質的改善に関する基調講演が行われました。就学率や退学率など量的課題と、カリキュラムや教師教育といった質的課題を総合的に扱う必要性が示され、PEDP を中心とした制度的アプローチの成果と限界、日本の長期的教育協力の役割、さらに専門家人材の強化と日本社会への知見還元の重要性が提起されました。続くパネルディスカッションでは、関与した専門家が活動写真を交えて成果と教訓を共有し、長期的で柔軟な協力や現場重視の姿勢、現地主体を尊重する専門家の態度が評価されました。今後は児童中心型授業の定着や学力向上に向け、現地教育専門家による主体的なリーダーシップへの期待が示されました。

<登壇者>

- 馬場 卓也（広島大学大学院 人間社会科学研究科 教授）
- 萱島 信子（元 JICA バングラデシュ事務所長）
- 持佛 賢一（株式会社パデコ 元バングラデシュ初等理科プロジェクト 副総括・理科教育）
- 清水 欽也（広島大学大学院 人間社会科学研究科 教授）
- 河原 太郎（元 JICA 海外協力隊 バングラデシュ小学校教諭）
- 奥川 由紀子（元 JICA バングラデシュ専門家 教育政策アドバイザー）
- 相馬 敬（株式会社パデコ 元バングラデシュ初等理科プロジェクト 総括）



プレゼン中のスライドより抜粋

株式会社パデコ 鈴木美悠

国際協カや教育協カに関心のある学生や若手社会人に向けて、国際協カ・教育協カに携わる実務者、研究者、NGO、民間企業の方の幅広いキャリアパスを共有し、関わり方について議論しました。

パネルディスカッションでは、理論と実践の融合（理論と実践のどちらから関わるか、協カ隊活動と修士課程を同時に行うザンビア特別教育プログラムの例）や、修士課程の選択方法（カリキュラムから選択する、自身が持つ問いを学べる教員から選択する、等）について、各登壇者の経験をもとに考えが示され、登壇者間での意見交換も交えながら、多様なキャリア選択の可能性が提示されました。

最後に清水教授から、実践が先か、理論が先かの議論があるが、本日のセッションから「思い立ったが吉日」であり、様々な道があることが示されたとのことで締めくくりました。

参加した学生から、『理論と実践のバランスについてのお話が印象的でした。』との声がよせられました。

<登壇者>

清水 欽也（広島大学 人間社会科学研究科 国際教育開発プログラム 教授）

石原 伸一（広島大学 人間社会科学研究科 国際教育開発プログラム 特命教授）

岡 あゆみ（テラル株式会社）

木村 光宏（岡山理科大学 学生支援機構 グローバルセンターIB 教員養成プログラム コーディネーター）

高尾 タビタ（ワールド・ビジョン・ジャパン 支援事業部第1部 人道・開発事業第3課 プログラム・コーディネーター）

本郷 健人（JICA 人間開発部 高等・技術教育チーム 職員）

山下 さくら（株式会社パデコ 教育開発部 コンサルタント）



登壇者の皆様（後段中央から時計回りに、本郷さん、山下さん、高尾さん、木村さん、石原先生、清水先生）



岡さん（上段左からお二人目）もオンラインで登壇されました。

人間開発部 基礎教育第一チーム 深澤智子



本セッションでは高専教育を事例に日本型教育の海外展開について議論を行いました。中村先生はモンゴルとタイでの高専教育の導入経験を通じ、高専教育の導入は教育制度の単なる輸出ではなく教育の文化と理念の共有のプロセスであること、また現地の人たちが自らの意思でその教育理念を背負い、時間をかけて育てていく「覚悟」が必要であることが言及されました。三宅専門家からはエジプト側が「日本と同質の本物の高専」の導入を求めている状況を事例として、社会的文脈・ニーズ、利用可能なリソース、持続可能性を鑑みながら、実践・現場レベルでのより丁寧な対話と実践者の躊躇を通じた EJ-KOSEN としての組織文化を醸成するプロセスの重要性について言及がありました。パネルディスカッションでは、JICA 岡野専門員が参加し、両登壇者と日本の高専モデルの海外展開がもたらす日本の高専の国際化への寄与や、日本企業との連携の可能性や期待などについて議論を行いました。

<登壇者>

中村 奨 (国立高等専門学校機構参事)

三宅 智保 (EJ-KOSEN JICA 専門家)

岡野 貴誠 (JICA 人間開発部 社会保障チーム)

人間開発部 社会保障チーム 岡野貴誠



◆若者がリードする対話

このイベントでは、3 人の高校生/大学生が MC を務め、小学生から高齢者まで年齢や立場を超えた対話が行われました。

◆失われて気づく平和の価値

三年半の戦禍に苛まれるウクライナから日本にやってきたイーゴルさん、そして、ALS と診断され余命宣告を受けながら社会貢献活動を続けることで絶望から蘇った畠中さん、この二人からは、通常失われて気づく平和の価値について、平素から思いを馳せ、これを守る努力の大切さが、実体験に基づく言葉で語られました。

◆未来につなぐ平和への想い

二人の話を受けて、小学生から大学生まで、それぞれにとっての平和、そして、それが自分ごととなるために条件について、それぞれの想いが語られました。また、フロアから、平和を築くためのキーワードとして、思い遣り、ユーモア、笑顔、知る、学ぶ、勇気、共感、対話、尊重などたくさんの言葉が寄せられ、それらを一覧で可視化する試みもなされました。

<登壇者>

イエプトウシク・イーゴル (NPO 法人日本ウクライナ友好協会 KRAIANY 副理事長)

畠中 一郎 (一般財団法人すこやかさ ゆたかさの未来研究所代表)

筑波 結花 (大学 2 年生)

板谷 明香凛 (大学 1 年生)

藤本 真綾 (高校 2 年生)

山際 貴慈 (小学校 6 年生)

天谷 一葉 (高校 1 年生)

三好 華 (大学3年生)

梶田 真琴 (特別支援学級教諭)

戸田 隆夫 (NPO 法人 Forum2050 代表)

植嶋 卓己 (NPO 法人 Forum2050 監事)



セッション開始後 ■ 動画上映

・「途上国の子どもたちの暮らしと願い」カンボジアとバングラデシュから



日本ウクライナ協会クラヤヌイの副理事長であるイーゴルさんからのコメント



一般財団法人すこやかさ ゆたかさの未来研究所代表である畠中さんからのコメント



若者を中心にイベント運営を行い、参加者の意見をチャットで収集・可視化する

特定非営利活動法人 Forum2050 戸田隆夫/板谷恵子

教育協カウィーク

20年の歩み、そして未来へ： PNG 教育協力の軌跡と共創の未来図

本セッションでは「20年の歩み、そして未来へ：PNG 教育協力の軌跡と共創の未来図」をテーマに、オンラインでパネルディスカッションを行いました。これまでの20年を振り返りながら、教科書・教材づくりと活用、ジェンダーの視点、プロジェクトと協力隊・民間企業・国際機関との連携について、教育現場で活躍するメンバーが経験を共有しました。大きな気づきとして、理数科教育、教材開発、ジェンダーに配慮した支援を通じて、児童の学びと教師の教え方に変化が生まれていること、さらにカウンターパートが着実に成長し、多くの経験や知見を積み重ねてきたことが挙げられます。算数アプリの経験や教科書が近隣国へ紹介される等、他地域との連携も新しい取り組みとして芽生え始めており、次のステップに向けた明るい兆しを感じられました。今後はこうした歩みを土台に、様々なステークホルダーと一緒に「共創」をPNGに留まらず他国へも広げていくことが期待されます。

<登壇者>

- 木田 光二 (JICA 教育政策アドバイザー)
- 伊藤 明德 (アイ・シー・ネット株式会社)
- 芹澤 克明 (学校図書株式会社)
- 鈴木 佑 (JICA 海外協力隊)
- 東谷 あかね (アイ・シー・ネット株式会社)
- 近藤 智春 (UNICEF パプアニューギニア事務所)



セッションの様子 (上から木田氏、伊藤氏)



パネルメンバーと企画者・登壇者 (左上から伊藤氏、安川氏、杉山氏、木田氏、芹沢氏、東谷氏、近藤氏、又地氏)

アイ・シー・ネット株式会社 安川 奈々恵

教育協カウィーク

理科教育における動画教材の効果とは？
途上国での活用のヒントを探る

本セッションは、途上国の理科教育における動画教材の活用について考えるきっかけを提供することを目的として、はじめに日本の理科教育における映像メディアの活用の歴史や背景について振り返り、さらに日本の教育現場での動画教材の活用状況や成果・課題について、登壇者に発表いただきました。次に、途上国における動画教材活用の事例として、JICA 事業「モンゴル国デジタル教材の開発・導入による理科教育の質改善（プロジェクト研究）」について経験や成果・課題を発表いただき、日本との共通点や相違点を議論しました。

コミュニケーションツールとして動画教材が持つ様々な機能について学んだ上で、途上国の理科教育協力における動画教材の多様な活用方法を考える視点や事例について、日本の教育現場での経験をヒントに学ぶことができました。途上国における今後の理科教育改善に関する具体的な活用方法について多くの示唆が得られたセッションになりました。

<登壇者>

- 吉岡 有文 (看護学校、通信制高等学校)
- 長谷川 智子 (東京都公立中学校)
- 来島 孝太郎 (アイ・シー・ネット株式会社)
- 田中 大介 (株式会社 Gakken)



登壇者の方々。左から田中氏、来島氏、吉岡氏、長谷川氏



セッションの様子

人間開発部 基礎教育第二チーム 千 和起子

教育協カウィーク

クロージングセッション

最終日のクロージングセッションでは、大学有識者、NGO、開発コンサルタント、JICA の登壇者により、教育協カウィーク全体を振り返りつつ、ポストSDGs を見据えた日本の教育協カのあり方について、幅広く語っていただきました。

5名の登壇者からは、昨今の教育協カの潮流である、障害・ジェンダー主流化、ノンフォーマル教育、デジタル技術等への対応が強調された他、現場に寄り添う支援の再認識、多様なアクターが協働するコレクティブインパクトの創出、世代を超えたアクションの重要性など、日本の強みを国際教育協カの本流でどのように活かしていくか、異なる視点から議論が展開され、教育協カウィークが締めくくられました。

<登壇者>

高橋 美奈子 (株式会社毛利建築設計事務所 社会開発プロジェクト室次長)

小荒井 理恵 (教育協カ NGO ネットワーク (JNNE) 事務局次長)

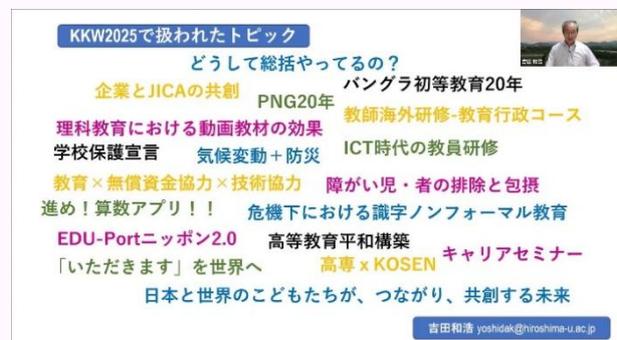
丸山 隆央 (JICA 人間開発部 基礎教育グループ 基礎教育第一チーム課長)

井上 数馬 (JICA 人間開発部 高等教育・社会保障グループ 高等・技術教育チーム課長)

吉田 和浩 (広島大学 IDEC 国際連携機構 教育開発国際協カ研究センター 教授)



セッションの様子。上段左から、高橋氏、小荒井氏、丸山氏。
下段左から、井上氏、吉田氏、川杉 (司会)。



吉田氏によるご発表の様子。

人間開発部 基礎教育第二チーム 川杉 麻衣

【編集後記】

教育協力ウィークにご参加頂いた皆様、登壇頂いた皆様、運営に協力して頂いた皆様、ありがとうございました。

5回目の今年は21のセッションを行いました。従来からの重要テーマに加えて、新機軸、長年の協力の振り返り、企業の皆さんとの共創といったテーマで、議論が深まりました。

また今回の実験的な試みとして、留学生や大学生も交えた「ポストSDGsで目指すべき理想の学び」の議論、教育協力の実務者や研究者によるフランクな意見交換会を行いました。様々な角度からの意見に視野が広がり、現場での悩みや提言を本音で語って頂いたので、大いに気づきがあり、考えさせられた時間となりました。

改めて、世界の子どもたちがより良く学べるように、という思いをもつ同志の皆さんに胸を熱くした、5日間でした。

なお、都合により対面を含むセッションを直前にオンライン開催に変更させて頂いたこと、アーカイブの共有を取りやめさせて頂いたこと、ご不便とご迷惑をおかけしたこと、お詫び申し上げます。今後は広く皆様にお届けできるようにしたいと思います。

人間開発部基礎教育グループ長 松山 剛士

「教育ナレッジマネジメントネットワーク（KMN）」とは

JICA 教育ナレッジマネジメントネットワーク(KMN)は、JICA の教育協力事業の質向上を目標に、JICA の教育協力に関する知見や経験を一元的に蓄積し、事業に活かすとともに対外的に発信するために、人間開発部を中心に活動を行っています。具体的には、①戦略（事業戦略、ドナー連携等）、②ナレッジの創造（プロジェクト研究、インパクト評価等）、③ナレッジの共有（民間・大学とのネットワーキング）、④広報（ナレッジの蓄積・発信）等の活動を実施しています。「教育だより」では、こうした教育 KMN の取組のほか、教育協力に関わる国際的な動向や実施中の案件情報等をあわせてお伝えしていきます。教育 KMN および JICA 基礎教育、高等・技術教育、社会保障グループからの各種お知らせを希望の方は、

(1) 名前、(2)ふりがな、(3)所属、(4)役職、(5)職業、(6)E メールアドレスを明記のうえ、kadaishien-ningen@jica.go.jp までお送りください。